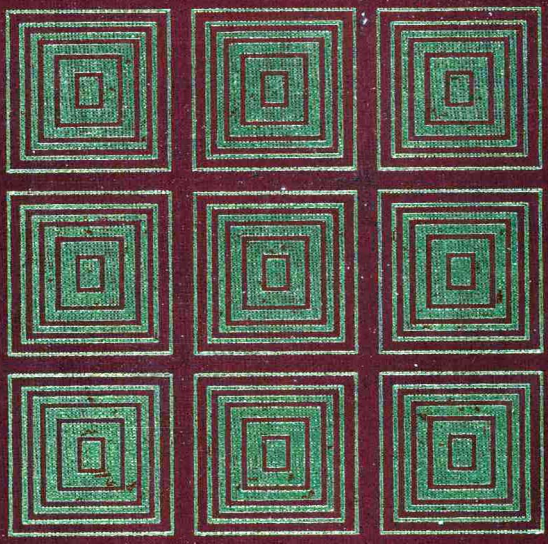
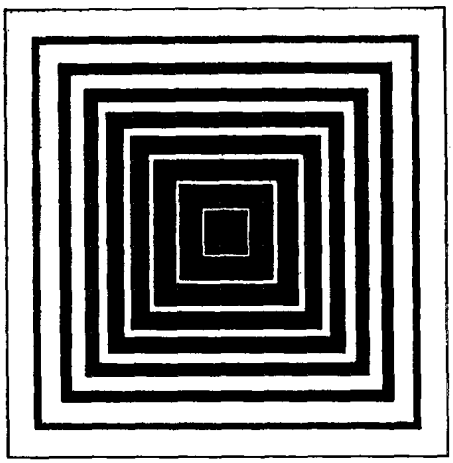


源氏物語

下

与謝野晶子訳



日本の古典—4

河出書房新社

日本の古典 4

源氏物語 下

昭和四十六年三月十日　初版印刷
昭和四十六年三月十五日　初版発行

訳　者　与謝野晶子
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

印　刷　凸版印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社
製　函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
定　価　一二〇〇円
©1971

0393—334104—0961

源氏物語絵巻・宿木（三）　徳川黎明会蔵

目次

源氏物語 下巻

紫式部

与謝野晶子訳

若菜(下)……一九
柏木……五五
横笛……七一
鈴虫……七八
夕霧……八四
御法……一一三
まぼろし……一三一
雲隠れ……一三〇
匂宮……一三〇
紅梅……一三五
竹河……一四一
橋姫……一五七
椎が本……一七三
総角……一八七
早蕨……二三四
宿り木……二三三
東屋……二六八
浮舟……二九四
蜻蛉……三二四
手習……三四七
夢の浮橋……三七六

〈作品鑑賞のための古典〉

本居宣長
源氏物語玉の小櫛……秋山　虔訳　三八三

解説　寺田　透　三
注釈　池田弥三郎　四〇八
挿画　平山郁夫
カット　佐多芳郎
解説写真　榊原和夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

玉鬘を軸として

上巻に収録された各巻のうち、「絵合」は日本に現われた現存最古の絵画論として重要であることを、筆者は『藝術の理路』という著書の一章で論じた。それでここではその点は省くが、落飾はしたけれど健在の朱雀帝の中宮薄雲の女院の前で、ひとびとが冷泉帝の妃弘徽殿の女御〔もとの頭の中将の娘〕方と、梅壺の女御〔六条の御息所の娘。後秋好の中宮〕方とに分れ、それぞれ蒐集した絵を出品して比べあわせ、勝負を争う遊びで、梅壺方の勝利を決定したのが、須磨隠棲当時光源氏がかきためた土地の実景の「墨がき」だったということは繰返さねばなるまい。

墨がきというのは、今日の塗り絵に相当する作り絵のための下絵にせよ、画家の本格的タブローの下図にせよ、要するに絵を完成態にもたらすための決定的デッサンと言えばまず適切な絵のことで、それを光源氏は現場で、「心の限り思ひ澄まして静かにかき給へる」によって、他のすべての出品を圧倒し去る傑作にしおおせることができたのである。光源氏自身の言葉を借りれば、「絵かくことのみなむ、怪しくはかなきものから、いかにしてかは心逝くばかりかきて見るべきと思ふ折々侍りしを、覚えぬ山がつになりて四方の海の深き心を見しに、さらに思ひよらぬ隈なく至られにし」事情によって、（かれ自身は「筆の行くかぎりありて心よりは事行かずなむ思う給へられしを」（本書上巻二二三頁）と謙遜するが）それらの傑作を生みえたのであった。

それは後世の水墨画でも白描画でもないが単なる略描でもなく、思いを澄まし、静かに、心の限りを、実景の「深き心」と相見えさせ、その機微を隈なく把握することによって実現される墨絵、――水墨画のうちの皮相の写実とは無縁の深遠透徹なレアリスム作品と言わば言えるだろう。ロマンチックにではなく、あくまで自然の実相観照の立場に立つ理想化とは言え、ともかく理想化された風景をえがく五代、宋周以降の南宗画、文人画などの水墨山水とは別種の、現実的な、しかし「心」的な水墨山水。それこそ以前頭の中将の語ったところによれば、絵所のもっともすぐれた絵師であってはじめてなしうるもので、光源氏はそれをみごとに実施しえたのである。

『源氏物語』のうちのこういう絵の好みは、森厳崇高な絹絵の仏画、あるいは現実に取材したものだが、教育的目的

比叡山の横川。
横川は、比叡山のもっとも奥深い閑静なところで、滋賀県の西端に位置する。むかし、この地に中堂があったが焼失した。
薫大将は、尼となった浮舟のようすを知るため、ここに住む「横川の僧都」を訪ねる。
「薫は山の延暦寺に着いて、常のとおりに経巻と仏像の供養を営んだ。横川の寺へは翌日行ったのであるが、僧都は大将の親しい来駕を喜んで迎えた。」（夢の浮橋）

もあり、様式化された四季絵、年中行事図を肌にあわないとして退けるところに成立つもので、われわれに、古典絵画以後の、どころか印象派以後、自然の無垢の姿をえがこうとするセザンヌの絵画思想を連想させるに足るのである。

是が非でも現代的でなければならぬ（ランボー）とするのもその時代、セザンヌの時代の思想だったが、無理にこじつけるわけではなく、現代的でありたいのは、『源氏物語』の主要理念のひとつだったと言っていいのだ。

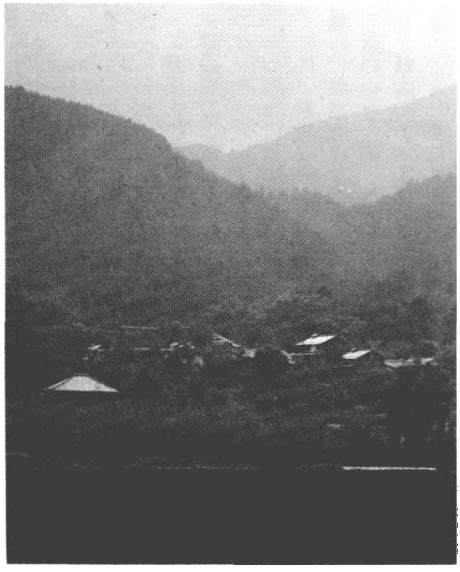
今日われわれは古典や王朝文化に対する讃美や愛好から『源氏』を読むが、『源氏』は新時代的でないものは同感しえないという立場で書かれていることを見失うべきでないだろう。

常陸宮の娘末摘花が物笑われなのも、第一その「居丈の高う、を背長に見え給ふ」みっともない姿、それから次は「あな片端と見ゆる物は御鼻なりけり……普賢菩薩の乗物と覚ゆ。あさましう高うのびらかに、先の方少し垂りて色づきたる事ことの他にうたてあり。色は雪はづかしう白うて真青に、額つきこよなう腫れたるに尚下勝ちなる面やうは、大方おどろ〳〵しう長きなるべし」という容貌、その上痩せっぽちだという外見上の醜さによるが、「ゆるし色のわりなう上白みたる一襲ね、名残りなう黒き袿かさねて、上着には黒貂の皮衣いと清らかに香ばしきを着」るという着付けの「古体さ」が大きくものを言っている。

（「末摘花」本書上巻一〇一頁以下）

「古体の故づきたる御装束なれどなほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろ〳〵しきこと、いと持て囃されたり。されどげにこの皮無うては肌寒からましと見ゆる御顔ざまなるを心苦しと見給ふ。何事も言はれ給はず、われさ

横川の大師堂。
現在、横川に残っている建物の中で、もっとも古いもの。「叡山の僧兵」の創始者といわれる良源上人を、本尊としてまつっている。



叡山の西ふもと、京都の大原の里。
落葉の宮が、母の御息所といっしょに住んだ「小野の山荘」は、このあたりに設定されている。

「御息所は物怪で重く煩って、小野という叡山の麓に近い村にある別荘へ病床を移すようになった。以前から祈禱をたのみつけていて、物怪を追いはらうのに得意な律師が叡山にこもっていて、京へはとうぶん出ない誓いをみ仏にしたというのを招くのに、都合がよかったからである。」

（夕霧）

この年の秋、夕霧の大将は、御息所を見舞いがてら、落葉の宮と逢うためにこの山荘を訪問する。

へ口閉ぢたる心地し給へど例のしゞまもこゝろみむと、とかう聞え給ふに、いたう羞らひて口覆ひし給へるさへ鄙びふるめかしうこと〴〵しく、儀式官の練り出でたる臂持ちおぼえて、さすがに打笑み給へる気色はしたなう、すゞろびたり。」

描写は遺憾なく嘲笑的だが、そればかりでなく、末摘花は貧しいが由緒ある家の世間知らずの女王らしく、ふたりの関係のできたのち、年末の贈り物として、「包み〔の上〕に衣箱のおもりかに古体なる」を贈ったりするのである。それが光源氏には「あさまし」。（本書上巻一〇三頁）

そういう顔形や着るものや習慣などの世俗的現実的な面でばかり末摘花は古風だったのではなく。その筆蹟においても、書道上の好みにおいても古風で、光源氏に眉をひそめさせる別の原因を形づくる。

「紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字つよう中さだ〔中古風〕の筋にて、上下ひとしく書い給へり。」（本書上巻九九頁）

こういう容貌、風態、教養の女性との邂逅を、（「末摘花」は「若紫」の次の巻である）、上巻の解説でも言ったように、素直な自然さと自然の気を多分に持った、まだ童女の、匂うような紫の上発見の物語のすぐあとに持って来たのは話を活気づける上で有効な筋立てに違いないが、それとともに、清新潑剌としたものと古風でひねこびたもの、生命の発露と老残のあいだにおける作者の去就を明示するために為された意図的な構成だと言えるだろう。「螢」の巻で言われている言葉を借りれば、作者も「物語をいと、わざとの事」にしているのである。（本書上巻三〇八頁。この件り晶子訳は原意にはそぐわぬだろう。）

現に「末摘花」の巻末に設けられた次の場面は、作者の作中人物評価をあきらかに見させるしくみになっている。（本書上巻一〇四頁）

「髪いと長き女〔末摘花も頭つきだけは美しいのである〕をかき給ひて鼻に紅をつけて見給ふに、かたにかきても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるがいと清らなるを見給ひて、手づからこのあかばな〔晶子訳と違って、これを紅花と解する説あり〕をかきつけて匂はして見給ふに、かくよき顔だにさて〔こうして、赤い鼻なんか

伝藤原隆能筆、源氏物語絵巻の「柏木(三)」（徳川黎明会蔵）。妻・女三の宮が柏木との過ちから生んだ子供（薫）を、光源氏が抱いているところ。柏木は罪の意識にさいなまれて悶死し、落葉の宮は自分を恥じて出家する。しかし光源氏は、二人の関係に気づかないふりをして、生まれた若君の顔を愛憐の眼で眺める。

平安時代の女性の服装。
上　物の具姿
下　小袿姿

が」交れらんは見苦しかるべかりけり。姫君見ていみじく笑ひ給ふ。」

このあとに成人した光源氏とあどけない紫の上との閑雅というべき色好みの戯れがつづくが、その引き写しは省略する。

とかく末摘花女王については、何につけ古めかしいということが繰返し言われ、「玉鬘」の末段ではそれが光源氏の歌論にからめて定着されさえするのである。（本書上巻二八九頁）

三十四五歳の壮年の光源氏はすでに六条の邸を建てて、そこに紫の上、明石の上、花散里、秋好の中宮の町を定めてあるが、それらの婦人たちに正月の衣裳を配るついでに末摘花にも「柳の織物に由ある唐草を乱り織」った「なまめいた」衣料を半ば皮肉に贈る。するとこれを受けた女王は「うるはしく物し給ふ人にて、あるべきことはたがへ給はぬ」性質から、使いの者に不体裁なかずけものを与えねばならぬものとして与える。それが光源氏に「わりなく古めかしくかたはらいたき所のつき給へる」「さかしら」として持てあまさせるが、使いにとどけさせた歌もかれに次のような皮肉を言わせる古めかしいものだった。

「いと恥づかしき君なり。古体の歌よみは『唐衣』、『袂ぬるゝ』かごとこそ、離れねな、まろもその列ぞかし。さらに一筋にまつはれて今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそ嫉き事は又あれ。」そう言って光源氏は歌合せの席と言えばきっと「まとゐ」という言葉を入れ、恋歌の三句目には「あだ人の」を入れる古典派をわらう挙に出る。

「よろづの草子、歌枕、よう案内知り見尽して、そのうちの言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ強く変らざるべけれ。〔末摘花の父の〕常陸のみこの書きおき給へりける紙屋紙の草子をこそ〔末摘花は〕見よとておこせ給へりしか。和歌の髄脳いと所狭く、病、去るべき心多かりしかば、もとより〔私のような〕後れたる方のいとゞ中々動きすべくも見えざりしに、むつかしうて返してき。」

このときの話相手も紫の上だが、それを「どうしてお返しになったのか。惜しいではありませんか。〔養女としている〕明石の姫君の参考書にもしたかったのに」というかの女は、ここでも末摘花の揺曳する影との対照で、ひどくおおどかに匂いやかに見えて来る。そういう風にこの巻も

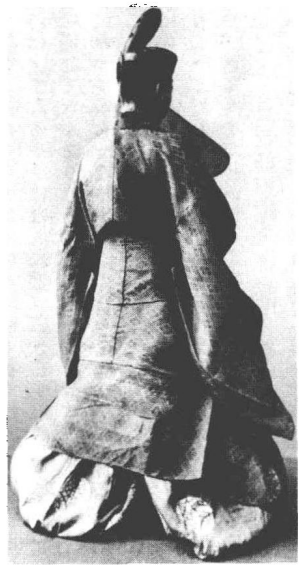
終っている。

（これにつづく光源氏の「女はたてゝ好める事設けて染みぬるは様よからぬことなり。……たゞ心の筋を源はしからず持て鎮めおきて、なだらかならむのみなむ、目やすかるべかりける」という女子教育の綱領は、自分には「やまとだましひ――体系的な知識教養でない現実的な臨機の応用の才」しかないので、息子の夕霧は大学に入れて漢学を学ばせようという「乙女」に物語られた男子教育の方針と対照的で、他方かれ自身の自己認識と照応するものであり、十分興味深いが、以前よそでも言ったことであり、今はこれだけの指摘にとどめる。）

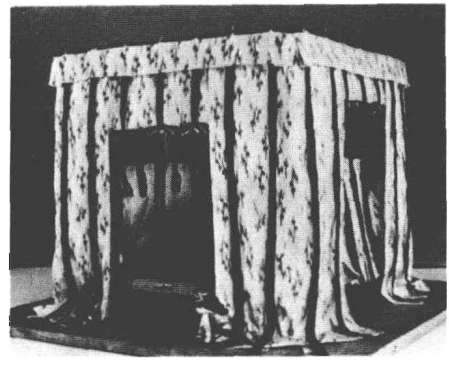
これに対して長く九州で家来筋のものに育てられていた玉鬘、あの夕顔の遺児は、かの女自身はどこにも今めかしとは書かれていないが、若いのは年齢上当然として、母の夕顔によく似て「若び」ているとされる。ともかく古めかしくはなくて、しかもそれが「かの末摘花のいふかひなかりし」（本書上巻二八四頁）ことを基準としてそのあとで記される。玉鬘は「竹河」によれば、今は帝位を退いて愛妻の秋好の中宮と「たゞびとのやうにて」暮している冷泉院が、その娘の院参にかこつけて身近に来させたいと心をときめかしている程「いと若う清げ」なのだ。

今も言うようにかの女自身を「今めかし」という例はなくても、かの女の尚侍としての出仕を飾る宮中の儀式を叙するくだり（「真木柱」）には、その言葉が繰返し記される。ということは今めかしい雰囲気の中にこそ、かの女がうつりよく納まるということだが、そういう玉鬘が光源氏には末摘花と違って繰返し言われるように「目やすい」のである。（「玉鬘」）。

こういう新旧評価の末に次の光源氏の書道論は現われるのである。



男性の服装。
右　夏の直衣
左　冬の直衣
（写真提供・鈴木敬三）

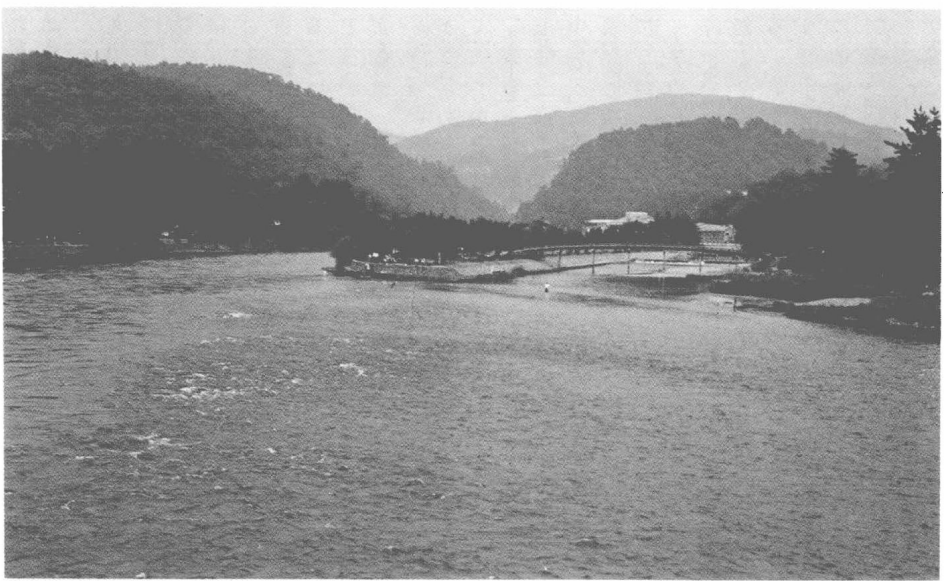


御帳台（貴族の寝所）。源氏の絵巻によって復元したもの。

引用の冒頭は古き世を高しとし、今を劣る世とする見解に違いないが、やがて宇治の八の宮、すなわちかれの弟の書について記されるところを斟酌してみても、これは要するに月並みの前置きにすぎない。さっきわずかながら取上げた明石の姫君の教育のうち、ここは特に書道教育についての光源氏の言葉であって、ここで上巻の解説でざっと触れた薄雲女院や朧月夜の内侍、朝顔の斎院の手に関する論評が行われるのである。(「梅が枝」本書上巻三六三頁)。

「よろずの事、昔には劣りざまに浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なく賢くなりにたる。古き跡は定まれるやうにはあれど、広き心ゆたかならず。一筋に通ひてなんありける。妙にをかしき事は外寄りて〔近代になってから〕こそ書き出づる人々ありけれど、女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集へたりし中に中宮の御母〔六条〕宮す所の心にも入れず走り書き給へりし一くだりばかりわざとならぬを得て、際殊に覚えしはや。さて〔そのせいで〕あるまじき御名もたて聞えしぞかし。……宮〔秋好の中宮。御息所の娘〕の御手はこまかにをかしげなれど、かどや後れたらん。……故入道の宮〔薄雲の女院〕の御手はいと気色深くなまめいたる筋はありしかど弱き所つきて匂ひぞ少なかりし。院の内侍のかみ〔朧月夜〕こそは今の世の上手にはおはすれど、あまりそぼれて〔ざれて。形を崩して。男に靡きやすい〕癖ぞ添ひ給へる。さはあれどかの君も前の斎院〔朝顔の女王〕とこゝ〔紫の上〕とこそは書きたまはめ。」

冒頭に見た対象の深い心に触れたところに成立つ写実的墨がきは、こういう風に例示された平安仮名の性質と呼応するものと言うこともでき、一方に中国水墨山水の法とか格とかを置いて比較すればこれは草のレアリスムと言える



京都府宇治市を流れる宇治川。いわゆる「宇治十帖」は、この宇治一帯を主要な舞台としてくりひろげられる。現在、宇治川は上流にダムができて緩やかな流れとなっているが、もとは激しい急流であった。浮舟が身を投げるのも、この川である。

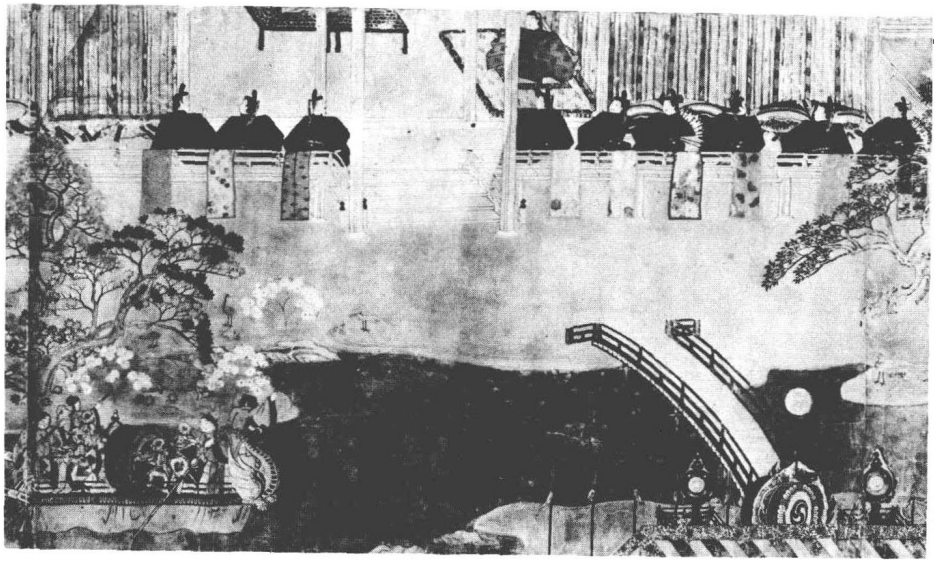
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だろう。新しいもの、若いもの、甲殻をこうぶらぬもの、形骸化にできるだけ遠いもの、常に今めかしいものが、こうしてもっとも親しむべき、尊重すべきものとして現われるのだ。

これに対して早くから世を捨てていて光源氏の死後十四五年してはじめて登場する宇治の八の宮、すなわち光源氏の弟みこの書体は、「草にいとをかしい」だけである（本書一七三頁）。与謝野晶子の訳文によっても明示されているとおり、この「草」は漢字の草体、万葉仮名と平仮名の中間にあり、まだ行きつくしえていない書体である。またこの宮が仏道修行の師とも伴侶ともしていた宇治の阿闍梨の文字は、「手はいと悪しくて、哥は、ひき放ちてぞ書きたる」と評せられるようなものであった。（もっともこの「ひき放ちてぞ書く」は「放ち書」とは別で、歌を詞書と分けて別行に書いたものを指し、与謝野源氏にあるように字を一字一字離して書くことを言うのではないという説が有力だが、僕は今は仮りに牡丹花肖柏、晶子説を採用して、この論をなす。それでは余りは仮設的だと思われるかも知れないが、それでもこの場合大した問題はなく、一字一字離して書くのが幼稚か朴直のしるしとされることを確かめれば今はすむのである。それで顧みると、「若紫」に、「今めかしい」光源氏〔本書上巻七七頁。晶子訳「艶な方らしい」〕が、将来紫の上となる童女の手を「かの放ち書なんなほ見給へほしき」〔本書上巻八一頁〕と、消息に書いているのが例として挙げられる。）

今回の解説は予想外に度々玉鬘の登場を求めることになったが、有名な『源氏』の小説論が展開されるのも、光源氏とかの女とのあいだのことだし、僕の見るところでは「紅梅」の巻で物語の舞台乃至対象、要するに登場人物の家系が源氏から藤原家に移り、それとともに、作風と言ってもよし、物語の空気と言ってもいいあるものが、それまでの精練され、幽暗哀切な気分が裏にはりつめている高雅さから、緊張のとれた明るいあえて言えば親しみぶかい下世話にさえ移行変転し、別の物語になったかと思われるのを、そのままなおもその『源氏物語』に繋ぐ役割を果すのも、――この刊本について言えば下巻を上巻に繋ぐ重い役を持っているのも、この玉鬘なので、なおしばらくかの女を引合いに出すことも、この巻の解説として許されぬことではないだろう。

宇治川のほとりにある平等院。
宇治は風光すぐれ、交通も便利だったので、古来よく貴族の別荘が建てられたが、中でも源融の宇治院は有名で、のち源雅信の所領となり、これを藤原道長が買いとった。道長はこの別荘で、詩歌・管絃の遊びをしばしば催した。そして、道長の長男頼通のころ平等院と称した。
夕霧の「宇治の山荘」は、この平等院をモデルにしたものといわれる。



伝光時筆、駒競行幸絵巻（三条家蔵）。後一条天皇の万寿元年（一〇二四）九月十九日駒競べの当日、天皇や皇太子が高陽院殿に赴かれたときの様子が描かれている。あたかも、帝と朱雀院が同道で光源氏の六条院に行幸された場面を連想させる絵巻である（藤のうら葉）。池には竜頭鷁首の舟が浮かび、音楽を奏している。

しかし糸口のまだ見えている今のうちに言っておきたいことがあるので、それを先に書く。

鬚黒の大将が、精神に異常のある正妻のまだ去らぬ自邸に、玉鬘を正妻とすべく迎える件り。――そう書くがこのときの玉鬘の心のうごき、わが身の処置はきわめて曖昧で、それは、かの女が光源氏の愛撫を受けつつそれを迷惑がっている場面が感じさせるかの女のなまめかしい曖昧さと重ね合わされてわれわれの頭脳に印象されるため一層曖昧と見えて来るのだが、まず夕霧が覗き見した後の場面はというと、（本書上巻三二五頁）

「〔光源氏が〕見やつけ給はむと恐しけれど、怪しきに心も驚きて尚見れば、柱がくれに〔玉鬘が〕少しそばみ給へりつるを引き寄せ給へるに、御髪の並寄りてはら〳〵とこぼれかゝりたるほど、女もいとむつかしく苦しと思う給へるけしきながら、さすがにいとなごやかなる様して寄りかゝり給へるはことゝ馴れ〳〵しきにこそあめれ。」（「野分」）

――このように描写されている。そのひとつ前の巻（「篝火」）では、かれらは初秋の夕篝火の火かげのとどくあたりの室内に和琴を枕に添い臥していて、そのときの男の思いは、「かゝる類ひ〔こんな風な並び寝だけの関係〕あらんや」という衝迫のこもるものであり、一方女は、「御髪の手あたりなどいと冷やかに、あてはかなる心地」するなまめかしいたおやかさなのである。この女の「らうたげ」なのは母ゆずりなのだ。（本書上巻三一九頁）

それにも拘らずかの女の「打解けぬ様」「物を慎ましと思したる気色」は余程手強いものだったに違いなく、二度目の関係を避けぬいた空蟬と、伊勢の斎宮、朝顔の斎院に対する他は無敵であった光源氏が、かの女らのように特別なところはありそうにもないこの「若びたる」二十二三の

女にそれ以上積極的に近づくことはできないで終る。壊れものだから大事にしたいという気持がはたらいていなかったとは言えないが。

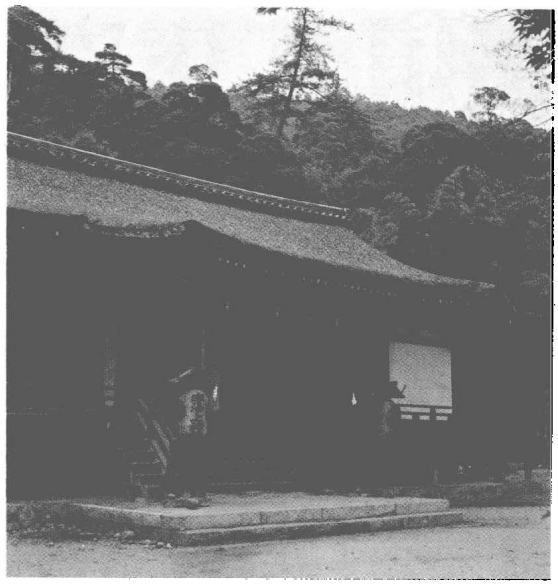
ところが今度のかの女の鬚黒の大将（のちには関白太政大臣になる）への嫁ぎ方は、「真木柱」の巻首に見られる通り、ひたすら次のように受け身で、それ故曖昧なのだ。

――「程ふれど〔玉鬘は鬚黒の大将に〕些か打解けたる御気色もなく、思はず憂き宿世なりけりと思ひ入り給へる様のたゆみなきを、〔鬚黒の大将は〕いみじうつらしと思へど朧げならぬ契の程あはれに、嬉しく思ひ見るまゝにめでたく思ふさまなる御かたち有様を、よそのものに見果てゝやみなましよと思ふだに胸つぶれて、石山の仏〔玉鬘に会うという幸運を恵んでくれた〕をも〔手引きをしてくれた〕弁の御許をも並べて頂かまほしう思へど、女君の深くものしと思し、疎みにければ〔以上の文の対格を男ととる説もある。筆者は「物しと思し」の対格は自分らの関係であり、そこで句が切れ、「疎む」の対格だけが男ではないかと思う。〕得交らはで〔この動詞の省略された与格を朝廷などと考える説もある。筆者はそれにも異子訳にも組せず、一般に玉鬘邸の人々との意にとりたい。そして六条邸の西の対の一室に〕籠り居にけり。げにそこら心苦しげなる事どもをとり〳〵に見しかど、心浅き〔玉鬘の方から言って〕人のためにぞ寺の験もあらはれにける。」（本書上巻三四四頁以下）

恋愛に自由があり、文化的に男と対等だったとされる平安朝の宮廷婦人も、かの女らが強い心をもっていても、実はいかに受け身に、諦念をもって生きねばならなかったかが、『かげろふの日記』や『和泉式部家集』『和泉式部日記』などからことに明白に読みとれるが、しかしそれらの表現の中にはいわば諦念や忍従やの中ではたらくかの女ら自身の能動的判断が見出されるのに、それがここの玉鬘の行為からは何としても汲みとれないのである。それがかの女を『源氏物語』中の女性として特別な、時代の下ったものに印象させる上で大きなはたらきをしている。

しかしかの女が、夫の歿後二女を院と内裏とに妃や内侍として上げ、そのあとでさまざまに心遣いする、すでに引いた「竹河」の件りでは、かの女はまさに処をえていると見え、やや平凡にはなったが曖昧さに煩わされない一人前の女である。それは、かの女が鬚黒の大将の妻となったために、母とともに祖父の式部卿の宮、すなわち中宮藤壺の兄であり紫の上の父である老人のもとに移ることとなった真木柱という少女、去りぎわに、住み馴れた家の柱の干割れに「今はとて」という別れの歌を「笄の先して押し入れ」た十二三歳になる、あえて言えば玉鬘の義理の娘に

能「葵上」。『源氏物語』に題材をとった謡曲は、「夕顔」「半部」「松風」「野宮」「浮舟」など数多い。これもその一つで、「葵」の巻を謡曲化したもの。六条の御息所が生霊となって葵の上にとりつき、悩ませる。

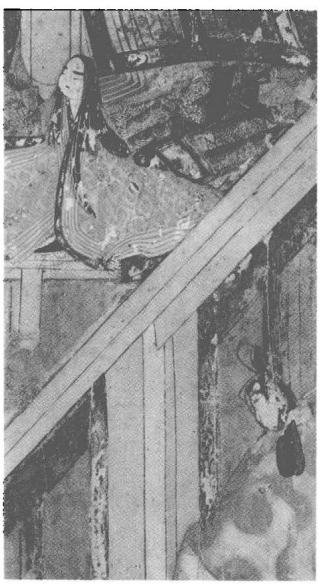


当る少女が、かの女に失恋した螢兵部卿の宮と結婚し、冷やかな夫婦暮しのあいだに一女をあげ、それから夫に死に別れて、今度はこれも妻に死別した按察大納言〔柏木の弟〕の「忍び通ふ」ところとなって「年経れば、えさしも憚り給はぬなむめり」という情況で再登場するのと相似、いわば同心円をえがくのである。（「紅梅」本書一三五頁以下）

そこの叙述は、主格は男で始められているが、

「御子は故北の方の御腹に女二人のみぞおはしければさうざうしとて神仏に祈りて今の御腹〔すなわち真木柱〕にぞ男君ひとり儲け給へる。故宮〔螢兵部卿〕の御形見に女君ひとところおはす。隔てわかずいづれをも同じごと思ひ交はし聞え給へるを、おの〳〵御方の人々などはうるはしからぬ心ばへ打ち混り、なまくね〳〵しき事も出でくる時々あれど、北の方〔真木柱〕いと晴れ〴〵しう今めきたる人にて、罪なく執りなし我が御方ざまに苦しかるべきこともなだらかに聞きなし思ひ直し給へば、聞きにくからで目やすかりけり。」

平明で親しみやすく下世話だというのは、作中人物のこういう生活態度、玉鬘にしてみると、まだ自分への恋心を捨て去っていないらしい冷泉院には上の娘の附添いとしても出入りせず、上の娘が院参したのを怨めしく思っている今上のもとに内侍として上げた中の君には会うためにはときおり参内するという種類の行為にもとづいての判断だが、それにたとえば「総角」の巻に見られる、匂の宮の宇治通いを戒める明石中宮の態度を併せ考えると、光源氏や雨夜の品定めの頭の中将などから見ると子に当る世代の女たちは、著しく家庭的で道徳的だと言っていいと思われて来る。ひとつ前の世代の六条の御息所は無論のこと、夕顔、藤壺、朝顔、朧月夜、――空蟬や紫の上にさえ、道徳の軛はかけられていない。空蟬は光源氏を避けながら、その避け方に遊戯があるし、紫の上は調和のとれた自然な人



宇治上神社。

宇治川のほとり、平等院の反対側の岸にある。「八の宮の山荘」は、このあたりを想定して描かれている。

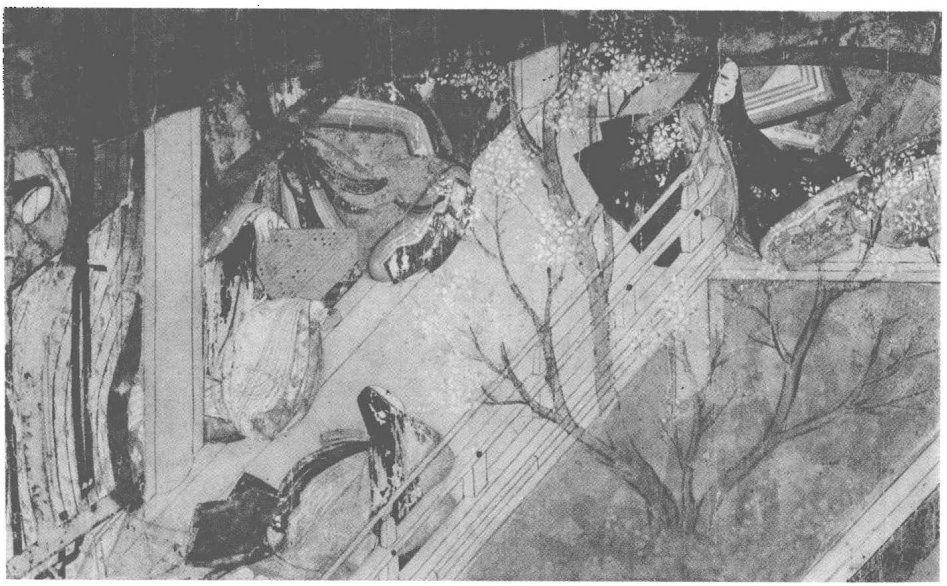
「八の宮のお邸は火事で焼亡してしまった。この災難のために京の中で、ほかにはお住みになるほどのところも、適当なお邸もおありにならなかったので、宇治によい山荘をもっておいでになったから、そこへ行って住まれることになった。世の中に執着はおもちにならぬが、いよいよ京を離れておしまいになることは宮のお心に悲しかった。網代の漁をする場所に近い川のそばで、静かな山里の住居をお求めになることには適せぬところもあるが、しかたのない御ことであった。」（橋姫）

柄の故に放縦にはならないのである。藤壺も光源氏との関係を深く恥じそれを罪としているが、世俗的な倫理規範にもとづいてそうなのではない。朝顔の女院も光源氏を避けきったが、それはかの女の好みにもとづいたことなのだ。光源氏はのちまでかの女を朧月夜と同列において、「なべて世のことにてもはかなく物言ひ交し、時々によせてあはれをも知り、故をも過ぐさず、よそながらの睦び交はしつべき人は、斎院とこの君〔朧月夜〕とこそは残りありつるを。」（「若菜下」本書四九頁）という位である。

花散里が嫉妬を知らず「おいらか」で縫い物好きなのも、努力のおかげではなく、人柄である。玉鬘と同じような関係に光源氏に対してあった伊勢の斎宮が、ずっと後、紫の上の死後、朝顔も朧月夜も出家してしまったあと、光源氏に「いふかひあり、をかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれ」と言わせるのも、倫理とは別の色好みと不即不離の存在のしかたのさせたものと言えるだろう。

ただ明石の上はどうだろうか。筆者が歌舞伎の女形の役どころともっともあざやかにいつも感ずるのがこの女性であることは前にも言ったが、このひとの自己抑制のきいた理智的な性格はそれ自体倫理的であり、儒教的近世の女性にごく近いと言っていいように思われる。その娘に今も見た明石中宮が生れ、その世代に玉鬘や真木柱や、宇治の姫君たちが集うのはまさに世代的なことである。

玉鬘の妹近江の君はそういう同世代の中で、かの女ひとりはめを外した野育ちの娘として、異彩を放つがそれはそれだけのことだし、またあえて言えば光源氏の妻となり、柏木の子を生んだ朱雀院の女三の宮は、本来属すべき世代から引離されてひとつ前の世代の中に入れられたために、



源氏物語絵巻「竹河(二)」（徳川黎明会蔵）。玉鬘の二人の姫君が、庭の桜の木を賭けて碁を打っている。碁盤のこちら側、柱を背にしているのが妹君、反対側が姉君。ほかの四人は侍女である。右手の戸のすき間から、姫君たちを覗いているのは、蔵人の少将（夕霧の三男）。

不幸になり、入道もせねばならなくなったのであり、度々姿は見せても、その影は薄いのである。

末が分らない点で、かの女以上に影が薄いと言っていい筈のかの女の異腹の姉、柏木の妻だったのがその死後夕霧の第二の妻となった落葉の宮が、それにもかかわらず起居の気配を感じさせはするのと、それが微妙な対比を見せている。

以上のようなことが、「螢」の巻の小説論に入る前に言っておきたいと思ったことの大体である。

その間における筆者の論調から、筆者が、少くも「匂宮」までの四十二巻とそれ以降との間に質的にもかなりの相違を感じていることは読者にも察せられたろう。（新々訳における与謝野晶子は「藤裏葉」までとそれ以降の各巻の作者を別と考え、作者ふたりと見ているが）、筆者はさらに「紅梅」と「竹河」の二巻と以下のいわゆる宇治十帖のあいだにも物語制作上の質的差異を見出す。

八の宮の仏教的隠遁生活から始り、薫中納言や宇治の大君の厭世、出家志望、僧侶の数多い登場、浮舟の出家などが次々と見られることから、ここを仏教に侵潤された部分と見る説があるが、筆者にはここがとりわけ仏教的だとは感じられない。むしろ事件の発生のせわしなさ、起る事件の異常さ、恋愛行為におけるイタリヤ風とさえ言える冒険小説性が目を打ち、ここで『源氏物語』が著しく大衆小説的になったとさえ考えられるのである。

この十帖では身分の差異ということもほとんど解消し、最初の四十二巻の源氏、すなわち臣籍を持つに至った皇族の物語とも、第四十三、四巻の、皇族の血は無論まじっているが臣族である春日明神の氏子の家の物語とも、大きく対立する、と読めるのだ。

源氏物語浮舟帖（大和文華館蔵）。
薫と匂宮との愛情の板ばさみになって悩む浮舟が、薫への返事を書きあぐんでいる場面。

薫中納言がその第一帖（「橋姫」）で、宇治の姫君姉妹を知って、それまでまじめすぎる心から承認できなかったロマネスクをついに肯定するに至ったように物語られているのは象徴的だろう。

「昔物語などに語りつたへて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむと憎く推し量らるゝを、げにあはれなる物の隈ありぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com